

ゆうかり放送委員会提供
ゆうかりに乾杯
第120回放送の概要 (2017年4月22日放送)

パーソナリティ
たろう
(佃 由晃)
なか
(中嶋邦弘)
かりん
(妹尾優香)
あな
(岸本幸恵)



ミキサー
門ちゃん
(門田成延)

会計
小山俊則

相談役
わたかん
(和田幹司)

1. ゲストコーナー(1) 神戸市立自立援助ホームこどもの家 主任指導員 有吉みはるさん

有吉さんは、社会福祉法人神戸真生塾に勤めておられます。神戸真生塾は多くの施設を運営しているのでその概要をお伺いします。

児童養護施設神戸真生塾は、親を失ったり、様々な理由で家族や家庭を離れて生活する必要のある子どもたちと共に、全ての職員が家庭的なホームを目指し、両親に代わって愛情と信頼にみちた明るい生活を、子どもたちの心身の健やかな成長を支援するものです。この施設には基本的には3歳から18歳までの子どもがはいてくる。有吉さんは短大の幼児教育学科を卒業後、この施設で小学校～高校生の男子の部屋を担当した。部屋は数名ずつに分けられ、親の立場で日常生活の世話をした。はじめの頃は短大卒業間もない時であったので、親というよりお姉さんの立場で接した。有吉さんは兄弟が多かったのでそのような感覚で4年間程対応してきた。

神戸真生塾子ども家庭支援センターは、阪神大震災時世界各国のロータリークラブから寄せられた義援金をもとに、1995年11月に神戸真生塾敷地内に建設されたもので。児童相談所の支所として、地域支援としても機能している。親からの相談の他、時には子どもからの相談もある。

真生きらきら保育園は、地域の子どもたちを対象としたもので、ロータリーが地域と繋がっている関係できらきら保育園を知って入園する園児がいる。

愛こどもクリニック(小児科診療所)は、地域の人は誰でも診療を受けることができる。施設の退所児、きらきら保育園の子どもも利用している。クリニックでの診療は女医さんで、乳児院の院長でもある。またカンガルーと呼んでいる病児・病後児保育も行っている。

神戸真生塾は 127 年の歴史がある。神戸女学院出身の水谷愛子さんが戦災孤児の救済を始めたことがきっかけで、1893 年（明治 23 年）に神戸貧民救済議会を設立し、1942 年に神戸真生塾と改称したものの。

真生乳児院は、基本的に新生児から 3 歳まで子どもが対象であるが、最近は就学前まで受け入れている。保護者が養育出来ない子どもを預かるが、お母さんが精神的な病気を患ったり、経済的に困っていたり、遺棄される場合もまれにある。乳児院も歴史は古い。乳児院での見守りは、子供一人ひとりに担当者がつき 1 対 1 の個別担当制をとっている。一緒に買い物に行き、クッキングをしたり、風呂も一緒に入る時間を設けている。家族と一緒に出かけたりして親子の時間を一緒に持つことで、関係の修復を図るようにしている。真生塾の特徴として、この場所を一つの家庭として考えるようにしており、先生とは呼ばず、おばちゃん、お姉ちゃんと呼ぶようにしている。乳児院は家庭としての生活の場であるので、保育園とは大きく異なる点である。乳児院は新生児も入ってくるので、眼が離せず、夜中も交代制で夜勤があり、ミルクの時間も赤ちゃんの状態を見ながら、24 時間の見守りをしている。有吉さんは小さい頃から子どもが大好きで、その頃から自分は保母さんになると言っていた。

乳児院を出て行くことになると、引き取り者がいない場合は、併設する養護施設に移る。また里親のもとに行く場合、最近はファミリーホームに行く場合もある。ファミリーホームは基本的に夫婦で対応し、自宅に子どもを招き入れ、自分の子どもと一緒に育てて行く。養護施設は原則 18 歳まで生活出来る場所で、今は最大大学卒業の 22 歳までになっているが、殆どは 18 歳で出ていく。自立援助ホームは、15 歳～20 歳までの自立する必要ができた子ども達の生活を支援する場所になっている。自立援助ホームには乳児院、養護施設の生活を続けてきた子どもも生活している。

2. ミュージック：「RUN」by インストポップバンド” nica”

トロンボーンという管楽器がメロディーを取るインストポップバンド ” nica” のオリジナル曲「RUN」です。甲陽音楽学院の同期で結成したバンドで、トロンボーンは兵庫高校OB、92 陽会の井浪直子さんです。

3. ゲストコーナー（2）

有吉さんが現在仕事をされている神戸市立自立援助ホームこどもの家について、このホームは何らかの理由で家庭に居られなくなり、働かざるを得なくなった原則として 15 歳から 20 歳までの青少年たちに暮らしの場を与える施設。養護施設を出て引き取り手、行き場がなかったり、高校を中退すると養護施設にはおれなくなるのでそのような子どもたちの生活の場になる。ホームは開所して 5 年になるので子ども本人が相談してきたり、親御さんから預かってくれますかという相談、学校の先生、弁護士など様々な問い合わせがある。また鑑別所、少年院などを経てくる子どももいる。18 歳未満の子どもは子ども家庭センター（児童相談所）を通じて入所してくる。

自立援助ホームに入ることが決まった子どもには、3 枚つづりのルールを書いた文書を渡し、十分説明している。重要なポイントは養護施設とは違い就労があること、貯金をすること、自立をするという本人の強い意志があること。15～16 歳では自立の意味もよくわかっていないが、就労することで自立の意味

が理解できるようになってくる。雇用主との関係が築けたり、理解を得たりすることで社会との繋がりが生まれることで子ども達に変化が生まれてくる。子ども達は行き場がなくなって来ているので、ルールを見た時子ども達なりに覚悟を決めている。貯金についても携帯についても、子ども達は健気にもその条件をのんでいる。ホームに着の身着のままて来る子どももいるので、最初は仕事が見つかったとしても給料は1, 2カ月先になるので、それまでの生活はホームで面倒を見ようとしている。本当に何も持たない子どもには支度金を支給し、職員と一緒に衣類を買いに行くことになる。

ホームに納める毎月の生活費3万円は、給料が入るようになってから分納させている。子ども達は毎月最低10万円の収入を目指して頑張っている。給料の半分は預金させるようにしているので5万円を引き、残りの5万円から生活費3万円、通勤の交通費、国民健康保険料の2千円を引き残りが小遣いになる。携帯電話を持てばその費用が引かれることになる。そうなると節約しようとかもっと働こうという気持ちになる。携帯の使用については自分名義で支払い能力がある場合は認めるが、入所前の環境を一度断ち切らせることが大事で、自分名義で持てるまでは一旦預かるか又は解約させる。働き初めてしばらく経つと支払い出来るようになり、環境にも慣れ生活も落ち着いてくるので、誓約書を取り交わし、施設長の承認を得て携帯を持てるようになる。誓約書に違反して没収になることはたびたびある。女子は寂しさからどうしても出会い系に走ったり、前の環境に連絡をとろうとする。



神戸市立自立援助ホームこどもの家

自立するために一番大事な就労について、仕事を見つけるスタート時点で仕事が決まるまでが本人、職員共に苦しい時期になる。入所するとすぐに職員がついてハローワークに行き、その足で商店街を回り、求人紙を探し、コンビニで求人誌を持ち帰り、電話をしたりするなど涙ぐましい努力をしている。これまでホームの子どもを採用してくれた雇用主が、子どもの家を理解し雇用が少しずつ増えている実感はある。

就労支援については、本日の放送に出演頂いている有吉さんの知人で司法書士の村上明貴子さん（80陽会）が、子どもの家を理解し情熱を持って集まってくれる有志によるNPOの設立に関与されているので、その状況について伺いました。

就職先を探すにしてもウエルカムばかりではなく、偏見を持って見られることがある。子どもも心の傷を抱えているので凄く苦勞している。そのため協力してくれる事業主を集め、個人ベースで動くのではなく、中学校のトライアルウィークのように雇用主の所で職業体験し、お互いに気にいったら就労できるように、繋がりが広がるようにと思って取り組んでいる。協力してくれる雇用主、有志の人を集めたNPOを設立し、子ども達がきちんと働き自立できるようになればと思い、子ども達の未来のために頑張りたいと取り組んでいる。NPOの設立申請を神戸市に提出したところで6、7月頃設立出来ると思う。将来子ども達も自立出来た時にはNPOで手伝ってもらいたいと思っている。

有吉さんの仕事は大変苦勞の多いと思うがどのようなところにやりがいを感じるかについて、子ども達と接していると暗さより楽しく日々を送れる明るい面が多い。色んな背景を持って子ども達がホームに来て、人との繋がりで変化していき、仕事しながら成長していく姿を見ていると、それが日常的なやりがいになる。ホームを退所後女子の場合、結婚し赤ちゃんを連れてくる子もおり、入所した時しゃべる事をしなかった子も営業職についてバリバリ仕事をして頑張っているのを見ると、人は環境と心掛け次第で変わる事を実感している。福祉の枠の中で育った子ども達であるが、その子どもたちが社会に出て仕事することでわずかでも税金を納め、社会を支える存在に変わる子ども達に一人でも多く転換させたいと思っている。

日常子ども達に接する時に気遣っていることは、楽しい日常会話をすることが基本と思っている。お母さんの立場で何気ないやりとりをして、朝出かける時に「行ってらっしゃい、気をつけて」と一言添え、そのようなことを積み重ねることで、子ども達からポツポツ言い出す時がくるので、1対1の空間と時間を持ってしっかり聞いてやることを心掛けている。

リスナーの皆さんには、自立を目指さざるを得ない状況の子ども達であっても、子ども達は自立の目標に向かって頑張っており、入所生活の中で変わっていている。そのような子ども達の未来を信じて、社会に参加するきっかけとなる仕事の紹介、採用してくれる雇用主になって頂けるようお願いしたい。

(後記)

今回は神戸市立自立援助ホームこどもの家から、主任指導員の有吉みはるさんにお越し頂きました。新生児の時から乳児院で生活をしなければならない子ども達、様々な理由で家族や家庭を離れて児童養護施設で生活する必要がある子ども達、また、様々な理由で家族から離れ自立するために自立援助ホームで生活しなければならない子ども達について、施設での生活の極一部についてお話を伺いました。

支援の必要な子供達は、今後も増え続けると思います。本日のテーマは初めてお伺いすることばかりです。未来を担う子ども達が明るい希望を持って生きていけるように、少しでもお手伝いできることを探していきたいと思います。

4. こぼれた話こぼれなかった話：初代県庁の復元プロジェクト

兵庫県は明治元年に廃藩置県に先駆けて設置されました。それから来年2018年で150年を迎えます。その時の初代県庁はどこにあったが知ってますね。兵庫の津にありました。

いま、その150周年を記念して、初代県庁を復元しようというプロジェクトが動き出しています。初代県庁は、明治維新のとき、江戸幕府直轄領を治める「大坂町奉行所兵庫切戸町勘番所（通称、兵庫勘番所）の建物が使われました。初代県知事はご存知、伊藤博文です。

兵庫勘番所は、1581年（天正9年）に織田信長の下で、池田信輝・輝政親子が築城した「兵庫城」があったところです。明治新政府は、兵庫県庁を、初め「兵庫鎮台」として、すぐに「兵庫裁判所」と改め、3月後にまたまた「兵庫県」としたのです。

その後、兵庫県庁は今の神戸港に近い「神戸地方裁判所」の場所へ新築移転し、明治6年に現在の地に移りました。兵庫城跡の旧県庁舎には、明治維新の教育機関、神戸で最初の学校「明親館」が利用しまし

た。

復元プロジェクトですが、兵庫県と神戸市と共同で、有識者や地元関係者でつくる委員会を設けて、設置場所（候補地としては、中央卸売市場跡が考えられます）や規模など話し合うことになっています。知事も、「県政150周年に合わせ、県庁発祥の地を、県民が歴史を振り返り、学ぶことができる場所、地域内外の多くの人々が交流できる場として整備して、県民の貴重な歴史文化資源を後世に繋ぎたい、としています。

5. 地域瓦版

“ヤングアメリカンズジャパンツアー2017 夏イン神戸”のお知らせです。英語で歌とダンス、3日間のワークショップで1時間の素敵なショーを作ります。小学1年生から高校3年生までの皆さん、歌って踊って自由に表現する喜びを感じませんか。5月19日～21日、宿泊ではなく、ショーは21日18時～、神戸文化ホール中ホールです。定員は200人で申し込みが必要です。



ゆうかりに乾杯の過去の放送音声と文書化した放送概要は、下記URLで視聴いただけます。

<http://yukarihyogo.jp/>